



第6号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

お文三帳(九)に次の文がある

『夫れ聖人御入滅はすでに一百余歳を経といへどもかたじけなくも目前にをひて真影を拝したて奉った德音ははるかに無常のかぜにへだつといへどもまたあたり実語を相承血脈してあきらかに耳のそこに一流の他力の真実の信心いまにたえせざるものなり』
 聖人の入滅は弘長二年である。このお文の書かれたのは文明七年である。まさに二百年のへだたりがある。それを蓮師はことさらに百歳とされた理由は、
 覚如上人の『遣訓絶えて幾の程ぞ旧跡を百余年の霜に慕う』によるものである。

これ血統のつづくをあらはせるものといよいよ深く頭を下げるものである。十一月一日から三日までの御待ちうけ法要を檀信徒一同結集して報恩の誠を致しましょう。

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
 虚假不実のわが身にて 清浄の心もさらになし

賢人ぶったり 悟りきつた顔
 をしたり、迷いを一切消し
 とめたふりをしたり、ついて来い俺に従
 えとばかりに指導者ぶったり
 りする今の世の人について
 かえりみもせず
 に光り輝く念仏の世界と
 持つて生まれた人間の本性
 の反省の：



聖人のおことば

『文沙汰シテサカくシキヒトノ、マイリタルオバ、
往生イカンガアランズラント、タシカニウケタマハリキ。
イマニイタルマデ オモヒアハセラレ候ナリ』

法然上にとの会話の一節である。親鸞聖人の師法然上人の下での生活は三十才前後のわずか数年のことであるが、この文はその頃のことであらう。

「サカサカヒト」これはいつの世にもある、えらそうにふるまう人、かしこぶる人、学者ぶる

人をいうのであらう。また、

法然聖人に宗教論争をも

ちかけてくる人をさすの

であらう。そうした人達

の人格をみとめ丁寧に返

答しなさいている上人がしのばれ

るのであるがそうした客人が帰られ、あとでふとおそは



の親鸞聖人にもらされた

のがこの一節と思われる。

念仏の師弟の平和なひる

さがりの一時のことだろ

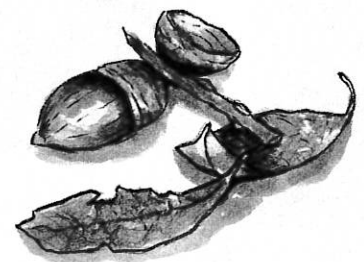
う。

親鸞聖人七百五拾回御遠忌(表白案)

私達は昭和三十九年の秋、聖人七百回御遠忌法要を執
行した。私達は本日ここに聖人七百五拾回法要をむかえ
ることになりました。

人間の一生は不思議なものです。長かったり短かった
り、苦しかったり楽しかったり人さまざまだと思います。
だからこそ私達は常住の世界をさがしもとめるのだと思
います。

宗祖親鸞聖人は幼くして父母に別れ源平争乱の時代を



過されました。されど聖人の願は常に凡夫直入の道を追求することでありました。

仏道に八万四千の門ありといいますが万人の望みをかなえさせるものこそ真の仏の願いなりとひたすら求道にあげられました。

法然上人によつてさがしもとめるといふ暗い時代は一

応の終りをとげますがこれ以

後念仏の慈悲と人間の根

性の深層は九拾才をこえ

てもつづけられることと

なります。



さて御遠忌法要を檀信徒皆々様の総力を得て執行出来ることは身に余る深い法縁のたまものとして。喜び致すものであります。

役員会に於いて御遠忌執行が決議されたのは平成十八年であります。席上一婦人が申されました。

「御遠忌を執行すると決議したが、みれば皆々様は八才をこえてみえる。その年まで生きているやら、どうなっているや。きまつたら早速実行してちょうだい。執行すると決めた私達がみんな死んで孫や子に執行してもらうようでは面目もございません」

この言葉によつて御待ち受けとして三年後の平成二十年十一月執行が決められました。月日のたつのは早いもの人生は無情そのものであります。委員長はじめ三人の有力役員を執行に先立ちお別れする羽目になりました。

私達は念仏の先輩に守られ育てられていると思ひます。

三役員 of 念力こそが私達をこの日まで導いて下さったと思ひます。敬々しく先輩

に両手をあわせるものであります。



命あるもの
 みな忙し
 干潟かな
 (えみ女)



枝打ち

すつきりしたなー
 心は どうか



みんなでわいわいやる
 ー日がくる



芝居けいこ

明日は 明日
 今生きている 秋の空
 (稲花)



おみがき



仏華

あの花も
 この花もつんで
 ほとけさま
 (西岸)

一一の花 一一の作業
 みんなで一つ



お華束づくり

銘木について

稲葉地の古木・老木を見学しているのだが。先日一友が訪ねてきた。

「もう銘木シリーズは終わりですか」

「そうだよ それらしい珍木もないわ」

と会話をはずませながら何所かにならないかと思案の末に思い出した。『あそこのねむの木だ』と。

その庭の面倒を毎年みている庭師さんに聞いて失望した。

「あの木は今年の冬になくなりました」

ねむの大木は珍らしい。

そのねむの幹は電柱ほど

太かった。

「桑田変じて大海となる」

と、つぶやいていた。



お宮さんの犬(二)

最近その犬達は三匹

で行動している。夫婦

とその子供の一匹だと

近所の方々は話してい

る。私はその子供犬に

はお会いしてない。

食事をあたえている方

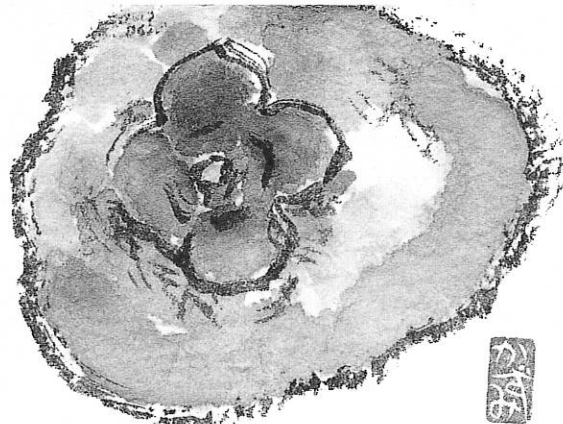
によると、お父さん犬

が一番先にお食事。次がお母さん犬、そして残りを子供

犬の順だそうだ。

「やはり強いものからですネ。野性のおきてですかネ」

と感想をもらしてみえる。



八十年という長い年月を稲葉地で過した。なつかしさは一入である。聖人のおことばに「長く住みなれた娑婆はなつかしく、まだ見ぬ浄土は恋しくない」といったことばが思い浮かぶ。

まことに恩愛の情は何人にとっても深いものがあるであらうと。

今日は稲葉地の二つの地藏さんのうち千太地藏について書いておく。

上のK家に金城という名馬がいた。お祭のつど、この金城をつれて稲葉地の若人達、近所かいわいの村々に出かけた(お万灯)。秋の一日御器所村からの招待を受け、先頭で金城というのぼりを立てて、千太さんが先頭で、ワッショイワッショイと言って出かけた。御器所村で接待を受け、夕方さんさんごご、稲葉地へ戻る事になった。飲みすぎたり疲れしたりして連中は村に戻ったが、この時千太の姿は見えなかった。数日たって大森から「金城ののぼりをもった若い男がのたれ死にしておる」との情報が届いた。推測するに、仲間からはずれた千太は大森の仲間についていったらしい。千太は物を盗むとか乞うとかは一切しなかった。善良そのものであった。この事を悲しんだ村人は千太をとむらい、地藏を建てた。

十月行事予定



十月十五日(水) 常任委員会

十月二十日(月) おみがき・女人講

二十八日講 同時執行

十月二十三日(木) 学習会

十月二十八日(火) 仏華一次

十月三十日(木) 仏華二次・寺内清掃

十月三十一日(金) 仏華・華東 完成

平成二十年

十一月一日・二日・三日

宗祖親鸞聖人七百五拾回
御遠忌お待ち受け法要 次第
副山主入山奉告法要

十一月一日(土)

午前十時 廣讚寺講員追弔法要
午後一時 初逮夜
説教 当山 住職
午後三時～五時 文化祭

十一月二日(日)

午前八時 晨朝
午前十時 副山主入山奉告法要
午後一時 結願逮夜
説教 本澄寺 明仁師
午後三時～五時 文化祭

十一月三日(祝)

午前十時 結願晨朝
(萬国戦争被害者追弔法要)
午後一時 結願日中
説教 廣瀬純史 師
庭儀 (稚児行列)

